

サイエンスキャンプ「哲学カフェを体験しよう」 実施報告

テーマ：校則

開催日：2018年6月2日（土）

開催内容：

帝京大学宇都宮キャンパスのサイエンスキャンプの一環として、作新学院高等学校英進部の生徒23人と「哲学カフェを体験しよう」を開催しました。

今回は「校則」をテーマとし、ファシリテーターとして総合基礎科目講師 江口建に加え、理工学部バイオサイエンス学科准教授 平澤孝枝と総合基礎科目講師 石川朝子が参加しました。

江口講師が「哲学カフェ」と「哲学対話」についてレクチャーを行い、2つのグループにわかれて対話に必要な「問い」を生徒たち自身で話し合い、「学校や教師から守るように言われているのにもかかわらず、生徒から見ても不要だと思える校則」を考え、それらを「どう考えても不要なルール」と「もしかしたら必要かもしれないルール」にわけました。そして、「もしかしたら必要かもしれないルール」の中から多数決で話し合うテーマをそれぞれ決定しました。

グループAに江口講師が、グループBに平澤准教授と石川講師がファシリテーターとして参加しました。

グループA（ファシリテーター：江口建）

◎テーマ案

【候補】 髪型、髪染め、襟ボタン、ピアス、スマホ、バイク乗車、靴指定、制服、化粧、アルバイト、男子のズボンの裾まくり（※女子のスカート丈は指定されていない）

テーマ：**なぜ作新学院ではアルバイトが禁止されているのか**

初めに、アルバイトをすることに賛成派と反対派の意見をそれぞれ出し合いました。賛成派の意見として、社会性を養うことができる、家計を助けることができる、学校は「自立が大事」と言っているのに生徒が自立しないようにしているのはおかしいと思うといった意見があげられました。また、反対派の意見として、進学校なのでアルバイトとの両立が難しく禁止でよいと思う、勉強や部活に支障があるので学生は学生らしくするべきだと思うといった意見があげられました。

それらの意見を賛成派・反対派の観点からお互いに質問しあい、学業とアルバイトの両立の難しさ、アルバイト先と学校が提携すればよいのではないか、条件を満たした生徒はアルバイトをしてよいのではないかなどといった意見が出され、高校生ならではの柔軟な発想力と鋭い視点で対話は進みました。そして、学校がアルバイトを禁止するのは生徒のためというより、学校のイメージやトラブル回避が目的

なのではないかという鋭い洞察にたどりつき、「公平性」という観点に話に移りました。

例えば、隠れてアルバイトをしている人がいた場合、学校側が黙認しているケースがあり、それは「公平性」の観点から見ておかしいと思うという指摘があり、それに対して、実はさまざまな隠れた前提があるのではないかという意見があがりました。権利の公平性は確保されるべきであるとはいえ、現実的には前提条件がそれぞれ異なり、条件を完全に度外視した「公平性」は成り立ちにくいということに生徒たちは改めて気づき、「公平性とはどういうことなのか」について考えるきっかけとなりました。

そこからさらに、「信頼関係」という観点に話が広がりました。校則の問題は、学校と生徒の信頼関係の問題であり、学校が信頼して生徒にアルバイトを許せば、生徒もその信頼を裏切らないように努力するのではないか、それが理想のあり方なのではないかという意見があがりました。しかし、学校と生徒が本当の意味で信頼関係を結ぶには、乗り越えなければならない壁があるのではないかということを確認し、対話は終了しました。

普段は考えないことを根本から考え、それを言葉にすることで、自分たちの考えがはっきりし、単なるクレームや不満ではなく、何がお互いにとって理想的なあり方なのかを模索することができました。

グループ B (ファシリテーター：平澤孝枝、石川朝子)

◎テーマ案

- 【候補】 髪型、髪染め、ヘアワックス、制服の指定（冬服と夏服を混合して着ることの禁止）、革靴を履くこと、携帯の使用が最小限とされていること（しかし、限度の規定がない）、靴下が強制

テーマ： **なぜ制服が必要で、着用しなければならないのか**

初めに、グループ A と同じく賛成派と反対派の意見をそれぞれ出しました。制服着用の賛成派の意見として、同じ制服を着ることで協調性が生まれる、自我がまだ確立されていないからこそ制服を着る、私服の種類や数でいじめが起こる可能性があるため最初から統一した方がよいと思うといった意見があがりました。また、反対派の意見として、そもそも協調性というものは服を統一することで生まれるのか、靴下を購入する店が決められており自由に買うことができなくて不便だ、制服は高価なものなので買い直すことができるかできないかで経済格差が表れてしまい、いじめにつながるのではないかといった意見が出されました。

賛成派・反対派の意見をもとにファシリテーターから、「制服がとてもオシャレだったらどう思いますか。うれしいと感じますか。それなら制服を着たいと思いますか」という問いが出されました。生徒たちは、そもそも学校は勉強をするところだからオシャレは必要ない、オシャレで気分がよくなれば勉強のモチベーションも上がると思うといった肯定的な意見と否定的な意見が両方あがりました。

そこで、教師や学校の立場で制服の必要性について考えました。「教師から見て制服を統一するメリットとは何か」という問いに対し、生徒たちを管理しやすい、将来的・社会的に規律を守ることのできる人間を育成できる、自己責任を身につけることができるといった意見が出されました。また、「教師や学校が制服というものにこだわるのはなぜなのか」という問いに対して、旧来の価値観を踏襲している、学校のイメージを背負っているからという鋭い指摘がされました。

ここから話はさらに広がり、最終的にテーマは「個性」、「自由」、「自己決定」に集約されました。生徒たちは、制服を着ていても着ていなくてもその人の個性は表れる、制服のない中学校に通っていた経験から学校の成績や勉強に制服の影響はないと思う、私服の学校は生徒に自由を与えているという印象をもったので社会人としてのマナーを高校生のうちから主体的に守らせていると感じる、作新学院はコースによって制服が異なるので、本当に必要か疑問に思うといった高校生らしい視点からさまざまな意見が出され、活発な議論が交わされました。

最後に、「では、明日から制服と私服どちらでも自由に選んで登校できるとしたら、どうしますか」という問いをファシリテーターが投げかけたところで、今回の対話は終了しました。さまざまな意見は出たが結局答えは出なかったというグループからの報告で締めくくられました。

どちらのグループのテーマにも、解決方法などはありません。さまざまな立場から物事を考え、多様な視点があることに気づいたことこそが、哲学対話の醍醐味です。今後もこのような機会を通して、「普段は考えないことについて、初めからじっくり考える」という哲学対話の場をさらに広げていきたいと教員一同考えています。

